

## 学会企画シンポジウム2

### 読み書き障害の早期発見と支援

#### ——基礎心理学と教育現場を取り結ぶ——

##### 【企画趣旨】

教育現場で抱える切実な問題の一つに、発達障害を抱える児童生徒への対応がある。文部科学省の調査によると、発達障害が疑われる児童生徒が普通学級に5%程度いることが分かっている。学校現場では、発達障害に関する理解も進み、具体的な対応も工夫されている。そうした中、自閉スペクトラム症や注意欠如多動性症などを抱える児童生徒が落ち着いて学習する環境も整いつつある。他方で、現在、課題になっていることは、それぞれ独特の「個性」を抱えた児童生徒に対してどのように学習を支援し、生きる力を養っていくかである。単なる反復学習が役に立たないことは明らかである。

特に、発達障害の中でも、学習障害を抱える児童は、教室の中で目立たず、小学校中学年まで気づかれないケースが多い。低学年の児童の読み書きには、個人差が大きいこと、また、クラスの中での発表などの場面ではそれらの児童は友達の発言を耳で聞き対応していること、それらの児童によるテストや宿題の間違ひも、一般の児童にも同様に多く見られ、単なる不注意で片づけられてしまうことなどが理由に挙げられる。読み書きの障害は、視知覚レベル、記憶と思考のレベル、手先等のコントロールのレベルの問題に分けて考えることができ、それぞれに応じた支援を考える必要がある。

教育心理学では、昔から音韻意識に関して基礎研究が行われ、音韻意識の発達が読み書きと密接に関わっていることが分かっている。現在、読み書きの記憶や処理のメカニズムから評価や支援に関する研究が行われおり、教育心理学の知見が教育現場に活かされる一つの事例となっている。

本シンポジウムでは、基礎心理学から教育現場に生かす応用研究まで、読み書きに困難を抱える子どもに関わる研究や実践を取り上げ、読み書きに困難を抱える子どもに対するより効果的な研究や支援の発展を促すことを目的とする。